

国際関連情報 IASB 赴任のご挨拶

着任のご挨拶と今後の抱負

IASB 客員研究員 よしむら けんいち
吉村 健一

2012年1月3日付で国際会計基準審議会(以下「IASB」という。)へ客員研究員(IASBでの肩書きは「Seconded National Standards Fellow」として出向しております。こちらではIFRS解釈指針委員会(以下「解釈指針委員会」という。)に配属され、現在割り当てられた幾つかの論点について作業を開始したところです。解釈指針委員会

ではスタッフ10名弱の陣容で日々世界各地から持ち込まれる実務上の論点をさばいております。

日本から解釈指針委員会をみていた時と比較すると、実際に現場に入り解釈指針委員会のメンバー及び担当スタッフとの距離が近くなって、その業務内容をより正確に把握することができましたが、より正確に理解するにつれてますます自分が担当する業務の難しさを実感することになりました。

世界100か国以上が採用している国際会計基準について持ち込まれる論点の内容が多様であることは言うまでもありませんが、解釈指針委員会としてどのような時に解釈を示すべきかという判断は非常に難しいことだという事を再認識しました。IFRS解釈指針委員会デュー・プロセス・ハンドブックによると、解釈指針委員会は「原則主義のアプローチを適用する」、さらに、「詳細なルールを指向する環境を作ろうとはしていない。また、緊急問題解決のためのグループとして活動するものでもない」として、あくまで原則主義のアプローチを採用しています。関係者からもっと多くのガイダンスを提供すべきという声もありますが、ある原則の解釈又はガイダンスを提供するという役割の中で、あくまで「原則が明確か否か」という視点から判断することの難しさを改めて実感しているところであります。

このような難しい環境の中での唯一の救いは、IASB内のすべての人々が私を歓迎してくれたことです。ソーシャルイベントも頻繁に行われており、バックグラウンドに関係なくIASBの一員として取り扱うという環境が整っています。このような恵まれた環境に私を置いていただいた日本の関係者の方々に感謝するとともに、そのご恩に報いるためにも何か価値のあるものを日本に持ち帰りたいと考えております。今後とも引き続き御指導のほど宜しくお願いいたします。